

## 序

手広遺跡は奄美にとって実に貴重な累層遺跡のひとつであり、行政機関も、地元の方々も研究者たちも、それぞれの立場からその保護につとめた。しかし自然条件の微妙な均衡の上に成立している砂丘が一旦そのバランスを崩されてしまうと、砂丘全体の変形はとどめようもなく、僅々一、二年のうちに幅1 mを越す数条の地隙を生じてしまった。こうした事情に、少し地面を下げて畑に利用したいという地主の要望と重なり、私への調査の依頼が届いた。

いろいろなきさつに足をとられながら、行政・住民・調査団の三者が力を合わせた。おりから他に大仕事を抱えておられた行政の方々の御心労は相当のものであったし、殆ど無償で立ち働いた調査団員の労苦については、それを描写する筆力の無いのが残念なほどである。調査の担当責任者として、関係者の全員に謝意を表したい。

ところで、本報告書の方も殆ど完成しているのだが、時期に迫られてこの略報を先に出すことになった。そして、出版資金としては当研究室に依拠する他に方法がなく、且つはその作業の中心部を当研究室が担当したので、研究室の「活動報告」に加えることにした。本報告書の方は資金の見通しのつき次第、必ず出版する。

最後に、真に遺憾であったのは、調査地点が旧景観を止めないほどに破壊し尽されたことである。第一報が電話で届いた時、巨大な調査坑への畑土の搬入作業を誤解したものと思い込み、通報者をなだめた。何日も話し合ったあの誠実そうな地主さんが嘘をつくとは考えられなかったからである。行政からも処置について意見を求められたが、それでも私の頭は混濁したままであった。

次の年、立寄って茫然自失した。一体どうしたと云うのであろうー？ その夜、近くに宿をとり、遺跡にうなされて眠れなかった。次の夜、名瀬まで逃れて仮眠した。今でも、酷熱にただれた砂丘に逢うと、無傷の砂丘のはずなのに、そのど真中が打ち抜かれて大穴になっているように感じることもある。

# 目 次

## 序

## 本 論

|                  |    |
|------------------|----|
| I. 発掘調査に至る経過     | 3  |
| II. 調査の実施と報告書の作成 | 4  |
| III. 遺跡の位置       | 5  |
| IV. 調査の概要        | 6  |
| 1. 調査区の設定        | 6  |
| 2. 層 序           | 6  |
| V. 遺 構           | 10 |
| 1. 弧状配列ピット       | 10 |
| 2. 石 組 遺 構       | 10 |
| 3. 焼礫の集積した遺構     | 14 |
| VI. 遺 物          | 14 |
| 1. 土 器           | 14 |
| 2. 土 製 品         | 26 |
| 3. 石 器           | 27 |
| 4. 骨・貝製品         | 29 |
| VII. おわりに        | 30 |

## 付 説

|                          |    |
|--------------------------|----|
| I. 動物遺存体                 | 33 |
| 1. イノシシ                  | 33 |
| 2. ウミガメ類                 | 34 |
| II. 出土貝類一覧表              | 35 |
| III. 出土貝類と民俗             | 35 |
| IV. C <sup>14</sup> 測定結果 | 35 |